

結婚式

2020.11.30

初任の玉川第一小学校では、こんなこともあった。自分の学級の子どもの姉が6年生だった。その姉はお友達を連れて、放課後になると、よく私の教室に来ていた。そして、ああでもない、こうでもない、私とおしゃべりをして帰って行くのである。若い先生だから話しやすかったのかもしれない。次の年には、小学校を卒業して中学校へと巣立っていった。

時はずいぶんと流れた。突然、その姉から電話がかかってきた。担任していた妹の方ではない。さすがに何事かと思った。子どもたちから突然連絡がくるというのは、たいてい結婚のことだと相場は決まっている。しかし、私は彼女の担任ではない。では、いったい何なのだろうか。

私はその姉の担任ではなく、放課後、よくしゃべっていたというだけのつながりである。話を聞くと、今度結婚するので、私に結婚披露宴に出席してほしいというのである。「いったい私はあなたの恩師といえるのか」という疑問が湧いた。

私は十分に話を聞いた上で、「私が出るのはおかしいだろう」という話をした。さらに話を聞くと、出席するだけでなくスピーチをしてほしいというのである。彼女にとっての恩師というべき中学校や小学校の先生が、どなたも出席しないため、仕方なく私にお願いしているのかと思った。小学6年生のときの担任の先生が出席するかはわからないという。

私が渋っていると、まわりにいた同級生たちが電話に出て加勢してきた。メンバーは、あの当時放課後になると私のところに来ていた面々である。10年以上の歳月はどっかにいつてしまっている。小学生の頃と何ら変わらない会話だった。

結局、説得に応じ、気が進まないまま出席することにした。スピーチも承諾した。当日、会場に行ってみると、懐かしい村の人たちにお会いできたのはよかったのだが、「なぜ、あなたがここにいるの」という表情が見てとれた。当然である。私は花嫁の妹の担任であって、花嫁の担任ではない。さらにばつがわるいことに、6年生のときの担任の先生は、ちゃんといるではないか。後で考えた。彼女たちは、私をだましたのである。担任の先生がいるとわかると、私が出席しないというと考えたのであろう。正確には、私が出席するわけにはいかないのである。

案の定、6年生の担任の先生のスピーチがあった。続いて私のスピーチである。私が紹介されると、多少驚いている方がいらっしまったことは事実である。何を話したかは忘れてしまったが、とりあえず花嫁とその仲間たちとの約束は果たした。自分の責任は果たした。自分の役割を果たしたかという疑問は残った。そもそも私の役割とは何だったのか。

今、思い出しても、出るべきではなかったと思う。その場では、明るく振る舞った私だが、内心は困っていた。放課後のおしゃべり仲間の私にまで出てほしいと考えた花嫁の意図は何だったのか。もう何年も経った後でも、電話がきてすぐに彼女だとわかったくらいだったのも事実である。担任をしていたかどうかは、もちろん大事である。だが、担任をしていなくても接点は少なくとも、通じ合う何かがある。出会いは、時間の長さではない。そのことを改めて彼女に教えてもらった気がする。